

K-871

# 要害古墳(第1号墳)

## 発掘調査報告書

2002

山辺町教育委員会

よう がい  
**要害古墳(第1号墳)**  
**発掘調査報告書**

2002年3月

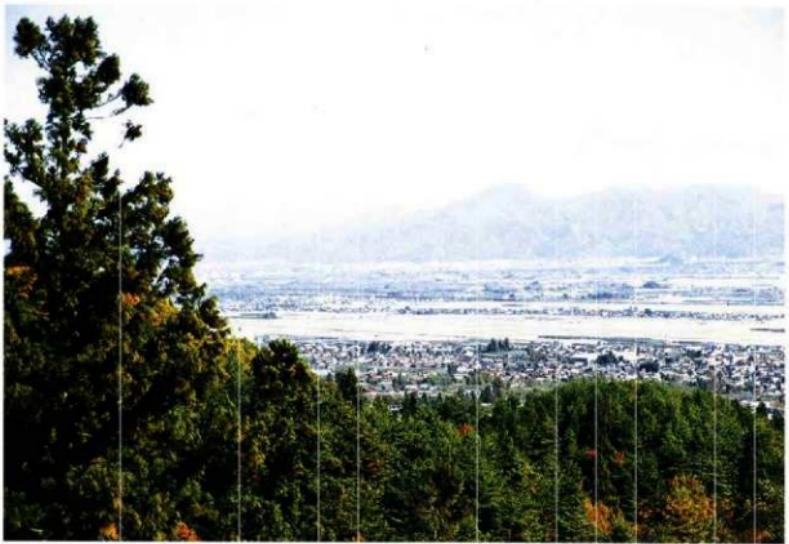
山辺町教育委員会



上空から見た要害古墳第1号墳



西側から見た要害1号墳



古墳から見た風景

## 序 文

本書は平成13年度に山辺町教育委員会で実施した、要害古墳（第1号墳）の発掘調査に係る報告書です。

山辺町は町内に多くの遺跡を有し、古より先人が生業を営み、生活の拠点としてきたところです。

この中で、特に性格が不明ではあるが重要と思われる遺跡について、平成12年度より3年間、文化庁の国庫補助をうけて調査を実施するものです。

2ヵ年目にあたる今年度は要害墳墓（古墳）の調査を実施しました。

その結果、山形盆地でも最古の部類となる古墳であることが判明しました。

從来4世紀の古墳時代前期の古墳は、山形県では置賜盆地でしか確認されていませんでしたが、昨年調査した大塚天神古墳、要害古墳（第1号墳）とともに前期の古墳であることが判明しております。

山辺町はある意味で、山形盆地でもっとも早く開発がなされたところの一つであろうと思います。

本書を発行することで、より一層郷土愛を感じ、発掘の成果を町民の方々に知っていただけますことを期待いたしております。

最後になりましたが、調査にあたっては地権者の方から多大なるご協力を賜りましたほか、山形県教育委員会などをはじめとする関係各位から適切なご指導、ご助言をいただきました。

ここに深く感謝の意を表し御礼申し上げる次第です。

平成14年3月

山辺町教育委員会

教 育 長 高 橋 達 雄

## 例　　言

- 1 本書は平成13年度に実施した要害古墳（第1号墳）発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査にあたっては、平成12年度から平成14年度まで、文化庁の補助を得て実施した。
- 3 調査要項は次の通りである。

### 遺跡所在地

要害古墳（要害古墳群1号墳）

山形県東村山郡山辺町大字要害字黒坂959番地の197

山形県東村山郡山辺町大字要害字黒坂959番地の199

調査面積 46.3m<sup>2</sup>

遺跡番号 山形県遺跡番号386（要害墳墓）

山辺町遺跡番号Y G I（要害古墳）

調査期間 平成13年10月5日～平成13年11月22日

現地説明会 平成13年11月16日

調査目的 学術研究

遺跡種別 古　墳

時代 古墳時代前期

構造 古墳1基

遺物 土師器、石器

調査主体 山辺町教育委員会

調査総括 高橋 達雄（教育長）

調査指導委員

川崎 利夫・茨木 光裕・黒坂 雅人

調査担当 三浦 浩人（文化係長）

調査補助員 高橋 玄寿・村山 賢司

事務局長 梶沼 静穂（教育次長）

事務局長補佐 峯田 誠一（次長補佐）

事務局員 鈴木 裕美・後藤 禮三・佐藤 繼雄・鈴木 利明

調査協力 山形県教育庁社会教育課文化財保護室・辻 秀人・阿子島 功

手塚 孝・菊地 芳朗・佐藤信市郎・佐藤 敬一・佐藤 庄吉

(株)武田組・社団法人山辺町シルバーパー人材センター

(株)日新技術コンサルタント山形営業所

調査参加者 五十嵐 貢・伊藤 重雄・伊藤 豊・久連山良夫・久連山八雄

高橋 一雄・会田 庄治・大内 豊・佐藤 庄吉・長岡宇之吉

挿図の縮尺は不統一であり、その都度スケールを明示した。

本書の作成・編集・執筆は三浦浩人が担当した。

出土遺物、調査記録については山辺町教育委員会が一括保管している。

## 凡　　例

- 1 本書の遺構実測（平面）図中の方位は磁北を示している。
- 2 本書で使用した遺構、及び遺物の分類番号は次の通りである。

S D…溝跡・周溝跡 S K…土壙

R P…土器・陶磁器 R S…石製品

遺構番号は現地調査時のものでなく、今回新たに付いているものもある。

3 土層観察においては、1995年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に掲った。

## 目　　次

### 序文

#### 例言・凡例

#### 目次

#### 挿図・表・図版・目次

#### 第1章 古墳の立地する位置と環境

1 地理的環境..... 1

2 歴史的環境..... 1

3 要害古墳の概要..... 1

#### 第2章 これまでの経過..... 3

#### 第3章 調査の成果

1 調査方法..... 6

2 Aトレンド..... 6

3 Bトレンド..... 10

4 Cトレンド..... 15

5 Dトレンド..... 15

6 Eトレンド..... 16

7 Fトレンド..... 20

8 Gトレンド..... 20

9 Hトレンド..... 25

10 出土遺物..... 25

11まとめ..... 32

報告書抄録..... 48

## 挿 図

図1 要害古墳周辺の遺跡	2
図2 要害古墳群古墳分布図	2
図3 測量調査図	4
図4 調査区設定図	5
図5 Aトレント平面図・断面図	7~8
図6 表土を除去した墳頂部の遺物出土分布	9
図7 Bトレント平面図・断面図	11~12
図8 Cトレント平面図・断面図	13~14
図9 Dトレント平面図・断面図	17~18
図10 Eトレント平面図・断面図	19
図11 Fトレント平面図・断面図	21
図12 Gトレント平面図・断面図	22
図13 Hトレント平面図・断面図	
図14 出土遺物(1)	27
図15 出土遺物(2)	28
図16 出土遺物(3)	29
図17 要害古墳(第1号墳)推定図	33
図18 要害古墳(第1号墳)推定図	34
図19 墳丘概念図	35

## 表

表1 出土遺物観察表	30~31
------------	-------

## 図 版

巻頭図版1 上空からみた要害古墳第1号墳	図版6 Eトレント・Fトレント・Gトレント	41
巻頭図版2 西側からみた要害1号墳	図版7 Hトレント・墳頂部の表土を剥いだ状況	42
図版1 上空から見たトレント設定状況	図版8 遺物(土師器)出土状況	43
.....	図版9 出土遺物(1)	44
図版2 調査前風景・調査中風景	図版10 出土遺物(2)	45
図版3 調査風景・現地説明会風景	図版11 出土遺物(3)	46
古墳遠景・Aトレント表土を剥いだ状況	図版12 出土遺物(4)	47
図版4 Aトレントサブトレント断面		
Aトレント調査状況		
Bトレントサブトレント断面		39
図版5 Bトレント焼土状況・Bトレントサブトレント断面		
Cトレント・Dトレント		40

## 第1章 古墳の立地する位置と環境

### 1 地理的環境

要害古墳1号墳は山辺町大字要害字黒坂地内にある。白鷹丘陵から山形盆地に傾斜を変える傾斜変換線に立地している。西側が低くなり、山形市大字淹の平のサイカチ(山辺町要害地区1戸含む)という集落に至る。北側には雨上沢があり、深い谷を形成している。

また、南側は主要地方道山形山辺線を挟んでさらに台地が続くが、その南は深い傾斜を呈している。東側は盆地にいたる斜面にあたるため単独の台地を形成している。

標高は墳頂部で286mであり、この場所からは、広く北は村山市、南は山形盆地から上山盆地へ移行する狭隘部までが見渡せる。律令制後の最上郡と村山郡の一部が手にとるように国見できるのである。

### 2 歴史的環境

要害古墳の付近には、図1の通り縄文時代の遺跡も多いが、古墳時代から平安時代にいたる遺跡が多數見受けられ、早くから開発がすんだことを物語っている。北側には現在相模公民館に石棺の石材を格納している根岸古墳(NG1)があり、普広寺境内経塚(NG3)からは12世紀ころの珠洲焼の外容器等が出土している。

また、目を東に向ければ、8世紀から9世紀の山辺南部条里遺構(AT1)があり、奈良時代にすでに律令体制に組みこまれていたことを示している。

大塚天神古墳(OK2)は4世紀後半の古墳で、山形盆地でも最古級の古墳である。西側には、出羽国の定額寺として貞觀8年(866)年に創建された瑜伽寺跡があったとの説がある淹の平地区が存在し、さらに西には須恵器を焼いた9世紀後半の玉虫古窯跡群(OK3)がある。中世においては、山辺荘と大曾根荘の境界となっていた地域であると推定される。

### 3 要害古墳の概要

要害古墳群(要害墳墓)は消滅したものも含め約13基が存在していたと推定される。

その分布はA地点の本1号墳、2号墳と消滅した古墳が存在したB地点、北側の台地上にあるC地点の3、4号墳、尾根の突端部に位置するD地点5~9号墳(1基は消滅か)となる。さらにA地点の県道を挟んだ南側はE地点で山形市となるが、ここにも比較的大きい古墳が2~3基程度確認できる。

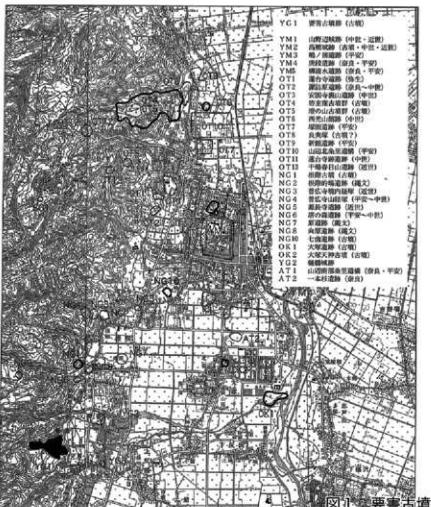


図1 要害古墳周辺の遺跡

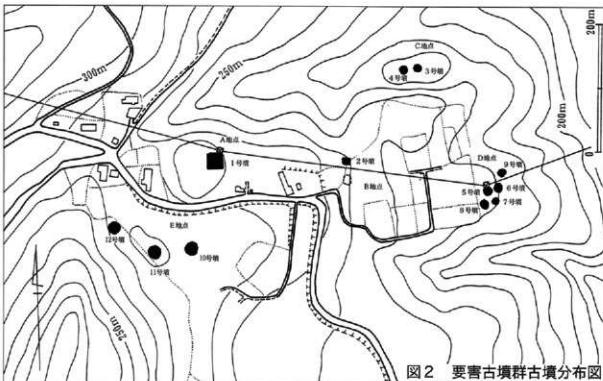


図2 要害古墳群古墳分布図

第2章 これまでの経過

今回の調査は、文化庁より補助を得て実施するもので、平成12年より14年までの3ヵ年間にわたる。

昨年度は、主に大塚地区の大塚天神古墳を調査している。

今回の調査のきっかけは、現在町史編さん事業に取り組んでいるなかで、その執筆時に問題となる性格のわからない遺跡があることから、当該遺跡について調査を実施して、位置付けを明らかにするために行ったものである。

要害古墳は、山形県遺跡包藏地図(1978)には、要害塚墓として掲載されているものの、郷土史家武田泰造は(A地点ではないと推定するが)この塚を山辺町郷土概史のなかで「要害古墳(二つ森古墳)」としており、いたいこの塚群は古墳時代の古墳なのか、それとも中世の塚なのかという着目がついていなかった。

そんな中、平成12年に東北電力(株)により送電線の鉄塔設置工事が、塚の西側で行われている。当町教育委員会では、その際に分布調査を実施し、遺構がないことと、遺物が出土しないことを確認している。

表土の下に褐色をした細砂層が厚く堆積し、多量の礫を含んでおり、基本的に動いていない土層となっていた。

平成9年には、送電線の鉄塔を塹の東面を削って設置する計画であったが、遺跡であるため西側に移した経過があった。その際に塙丘の一部に試掘調査を実施している。

この時、表土の下に褐色をした版築によるとみられる砂層を数層確認したが、古墳であるとの確認はできなかった。多くの礫を含むという理由などから、中世の塚である可能性が強いようであるとの推測を当時行っている。

以上の経過を踏まえ今回調査に踏み切ったのは、鉄塔工事に入るため塚の上の樹木や草が伐採され、墳丘の様子が明らかになり、この機会に調査を実施するのが最も適当となつたためである。

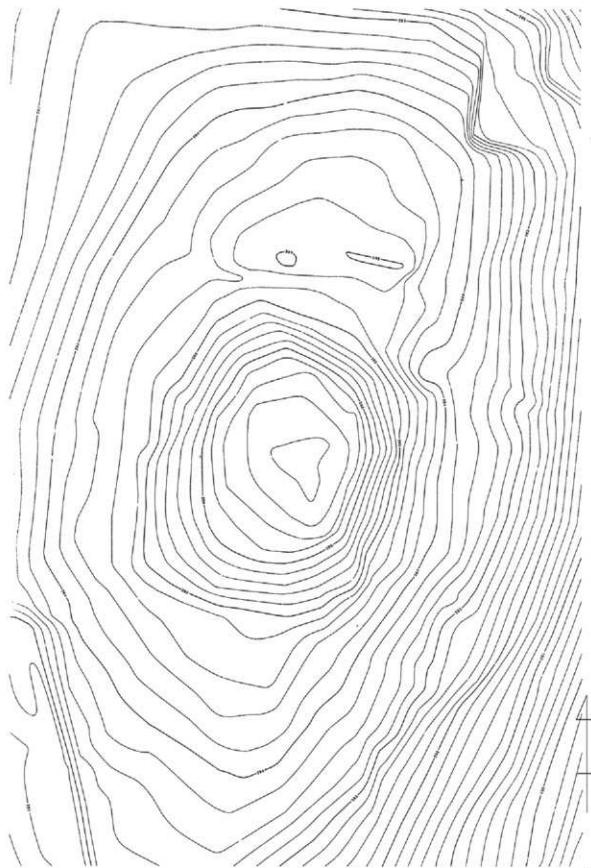


図3 要害古墳群1号墳測量調査図

- 4 -

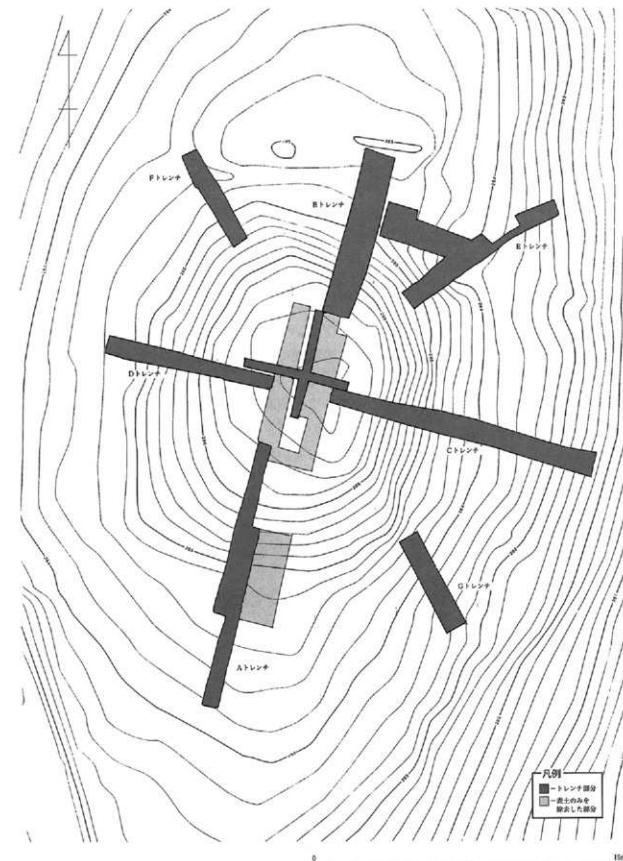


図4 調査区設定図

- 5 -

## 第3章 調査の成果

### 1 調査方法

今回の調査は、はじめに付近の地形図を作成し、その後真北のラインと東西に4m間隔でグリッドを設定し、墳丘に仮の軸線（方墳にした場合、東西で2等分となる南北の線）を設定、その南側をAトレンチ、北側をBトレンチとした。さらにその軸線に直交する形で東側がCトレンチ、西側をDトレンチとした。

以上の4つのトレンチで、方墳と仮定した場合の4辺の墳麓線を確認するが、円墳である可能性もあるため、墳丘に対して仮の中心点（A・BトレンチとC・Dトレンチが直交する点）より放射状にトレンチを3本設定している。

BトレンチとCトレンチの間にEトレンチ（北東線）、BトレンチとDトレンチの間にFトレンチ（北西線）、AトレンチとCトレンチの間にGトレンチ（南東線）である。

そして、最後に墳丘上の平坦面に対し、Hトレンチを設定した。

Hトレンチは、十字形に設定し、墓壙のプランを確認することを目的としている。

なお、これらのトレンチの多くは、調査の過程で拡張されている。

ここであらためて本調査の目的をあげておく。

- ①この塚が古墳時代の古墳か、中世の墳墓や宗教関連の遺構であるかの確認
- ②この塚の形はどのような形状をしているかの確認。具体的には古墳であるとしたら円墳か、方墳か、もしくは前方後円墳か前方後方墳かの調査
- ③この塚の形状がわかったとしたら、その規模（大きさ＝長さ・広さ・高さ）の確認
- ④古墳であるとしたら、その埋葬施設プランの部分的確認

### 2 Aトレンチ

Aトレンチは、墳丘南面の状況を確認するために設定している。1.2m×4.5mの調査区である。

調査に先立って実測図、図3をつくるが、この調査区の傾斜はだらかで、特に墳麓部はテラス状となっている。トレンチをいれる前に3mほどの幅で、表面の土を取り除くと明るく（白の強い）褐色の固くしまった土が現われ、その層がAトレンチの墳丘斜面全体にみられる。

墳頂面はその色が若干暗めとなる。これらは、古墳築造の際の化粧土であると思われる。

墳丘の裾と推定されるラインの少し上面でこの層は切れて、その切れた部分から裾のラインまで、石がまるで積まれたように確認できる。（AトレンチとGトレンチとの間にかけて帯状の石積がある）。これらの石が古墳に関連するものであるかを検討するため、調査区の西面のみを部分的に下げてみた。かたく非常にしまった層にあたる。その下（南）には、礫が多量に混じる層が出てくる。また、その南には礫層に被さるように粘土の層に入る。以上の様な状況により、かたくしまった層から下層については、盛土ではないことがわかる。

また、墳丘斜面にサブトレンチをいれ、墳麓部のサブトレンチと合わせて拡張し、盛土

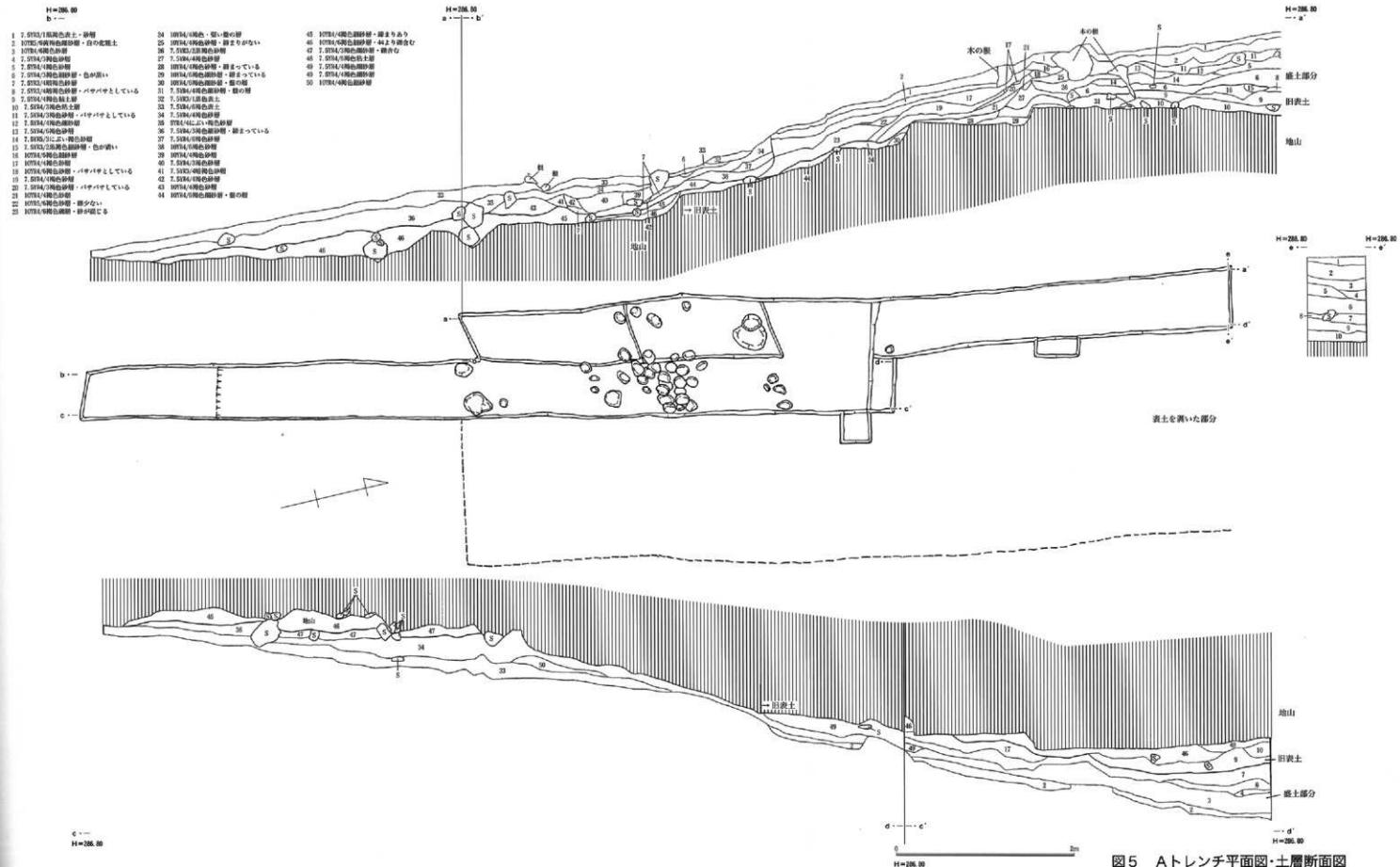


図5 Aトレンチ平面図・土層断面図

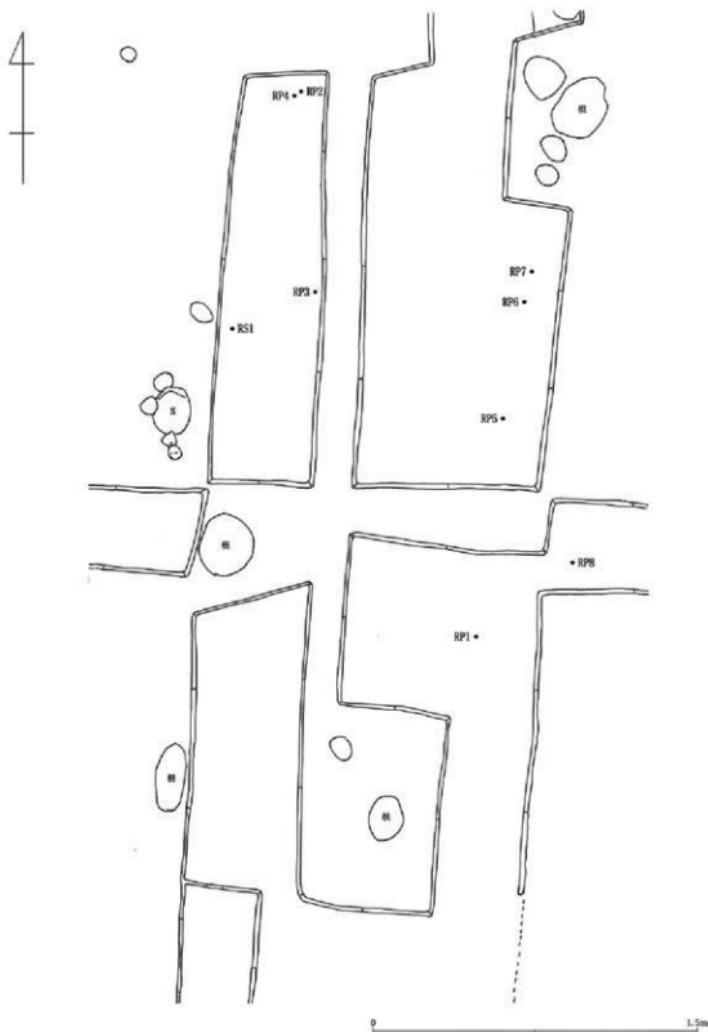


図6 表土を除去した墳頂部の遺物出土分布

の状況などを確認するように努めた。その結果、表土より50cm程下層にもともと腐植土だったと思われる黒色の層を検出している。

黒色層については旧表土であったと思われる。黒色層の下層には、南北にかたくしまった層を確認できるが、その線は旧表土を削り出した面と盛土の境界であると思われる。そのため、このラインより上の層は盛土がなされたと考えられる。

墳麓部のなだらかな傾斜を呈するテラス状の部分は、地山を削り出したところである。

この地山の斜面沿いには礫が混じる層があり、礫を葺いた、もしくは貼りつけた部分であると考えられる。

付近の土は、ほとんどが礫を多く含んでいることは分布調査でわかつていたが、そのあり余る石を部分的に利用して古墳を築造していくと思われる。また、墳丘内部の盛土の土層が変化するラインや、墳麓部でも礫が多く検出されている。この調査区の墳丘の高さは、墳頂部のもっと高いところからみて、テラス面まで 1 m 68.9cm、墳麓部まで 2 m 44.2cm となる。また、墳頂部中央からみると、テラス面まで 1 m 65.5cm、墳麓部まで 2 m 40.8cm である。

### 3 Bトレーナー

Bトレーナーは、墳丘北面の調査区である。1.5m × 8m を当初設定した。

墳頂部から墳麓部まで表土を剥いたあと、さらに古墳の地山と推定される面まで掘り下げている。この調査区は、以前確認調査で試掘を行ったところのため、攪乱層が入り込んでいる。そのため、攪乱が入った部分にサブトレーナーを実施している。その結果、土層の断面で周溝とみられる遺構（幅 1 m 90cm・底部幅 1 m・墳丘側での深さ 62cm・北側平坦面側での深さ 41cm）を確認した。その後、墳丘に向かって地山の面を追おうとしたが、地山のラインが途中からレベル的にさがっていることがわかった。そのため、地山の落込むラインを確認する目的で、サブトレーナーをいれ土層の断面の確認につとめた。

その結果、Aトレーナーと同じような黒色層を確認した。このため、この黒色層と地山を結ぶラインより上については盛土をしていることを確認できた。また、墳丘の土砂の崩落を防ぎ、墳形を保つためか、地山を削り出し、外側を高くし墳丘内部に向けて掘り下げ、その上に盛土している状況を確認できる。

黒色層の直下からは赤く焼け焦げた焼土がみられ、黒色層内にも炭化物が多く検出されている。古墳をつくる際に草木を取り、整地するために野焼きをすることが知られているが、当古墳もそのような形で、築造されたと思われる。旧表土（古墳築造時の地表面）ではもちろん、盛土層内にも炭化物（炭）が多く検出されているが、盛土をする際に混じったと考えられる。

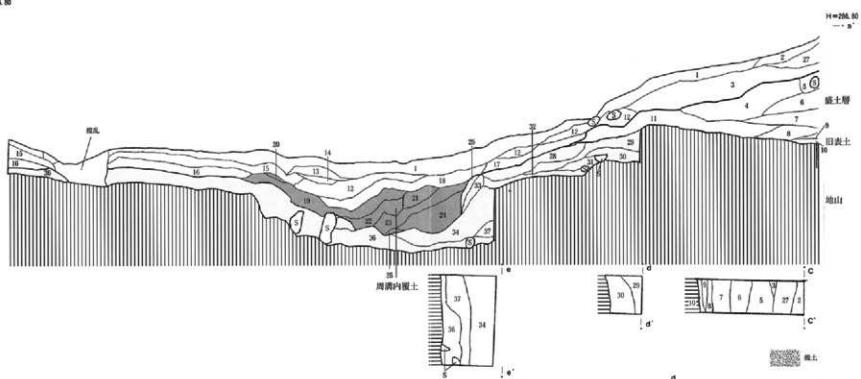
このトレーナーでは周溝を確認できる。もともとの地形は南北に長い丘であったものを、方墳として整形する必要があったため、北側を切断し、溝をつくったものと思われる。

現在北側の丘は平坦面となっている。

地形的にみると前方後円墳や前方後方墳をつくった方が容易であったとも推定される。

あえて方墳をつくっているともいえる。ここに葬られている者に対する政治的規制があつたとの推測も成り立つ。

また、北側のこの平場（平坦地）が祭祀に利用されていたと考えることも可能かと思わ

H=206.80  
a - -

1. 7.5TR2/褐色地帯砂層・底土
2. 7.5TR4/褐色地帯砂層
3. 7.5TR4/褐色地帯砂層・バサバサしている
4. 7.5TR4/褐色地帯粘土層
5. 7.5TR4/褐色地帯粘土層・より若干明るい
6. 7.5TR4/褐色地帯土層・より若干明るい
7. 7.5TR4/褐色砂層・バサバサしている
8. 7.5TR4/褐色地帯砂層・あらい空子を含む
9. 10TR4/褐色地帯粘土層・根付子多い
10. 10TR2/褐色地帯粘土層・下層に黒色の層を多く含む粘土
11. 7.5TR4/褐色地帯砂層
12. 7.5TR4/褐色地帯砂層
13. 7.5TR4/褐色地帯砂層・12より重い
14. 7.5TR4/褐色地帯砂層
15. 7.5TR4/褐色地帯砂層・薄砂層、表土より少し陥没。
16. 7.5TR4/褐色地帯砂層・バサバサだがまとまりやすい。  
柱はほとんど見えない
17. 7.5TR4/褐色地帯砂層
18. 7.5TR4/褐色地帯砂層・17より重い
19. 7.5TR4/褐色地帯砂層
20. 7.5TR4/褐色地帯砂層
21. 7.5TR4/褐色地帯砂層・バサバサしている
22. 7.5TR4/褐色地帯砂層
23. 7.5TR4/褐色地帯シルト層
24. 7.5TR4/褐色地帯シルト層・32より重い
25. 7.5TR4/褐色地帯砂層
26. 7.5TR4/褐色地帯砂層
27. 7.5TR4/褐色地帯砂層・しまり良い
28. 7.5TR4/褐色地帯砂層
29. 7.5TR4/褐色地帯砂層
30. 7.5TR4/褐色地帯砂層
31. 7.5TR4/褐色地帯砂層・30よりしまっている
32. 7.5TR4/褐色地帯砂層・31よりしまっている
33. 7.5TR4/褐色地帯砂層
34. 7.5TR4/褐色地帯シルト層・粗い
35. 7.5TR4/褐色地帯シルト層・粗い
36. 7.5TR4/褐色地帯砂層・地山・上面に石を含む
37. 7.5TR4/褐色地帯砂層

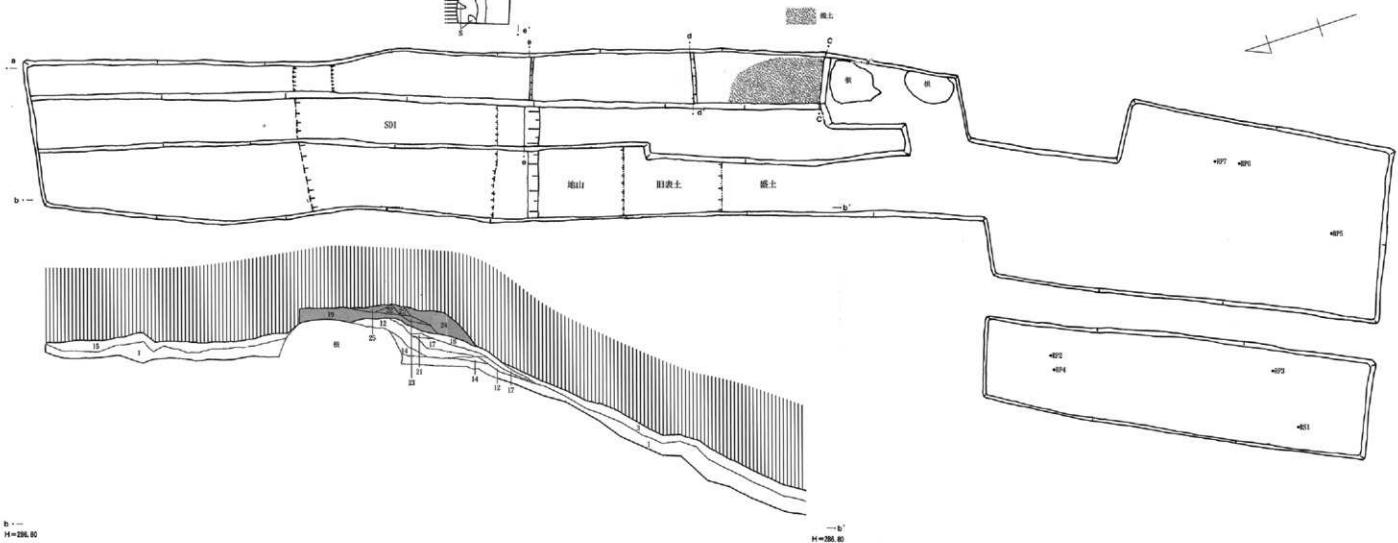
b - -  
H=206.80

図7 Bトレンチ平面・断面図

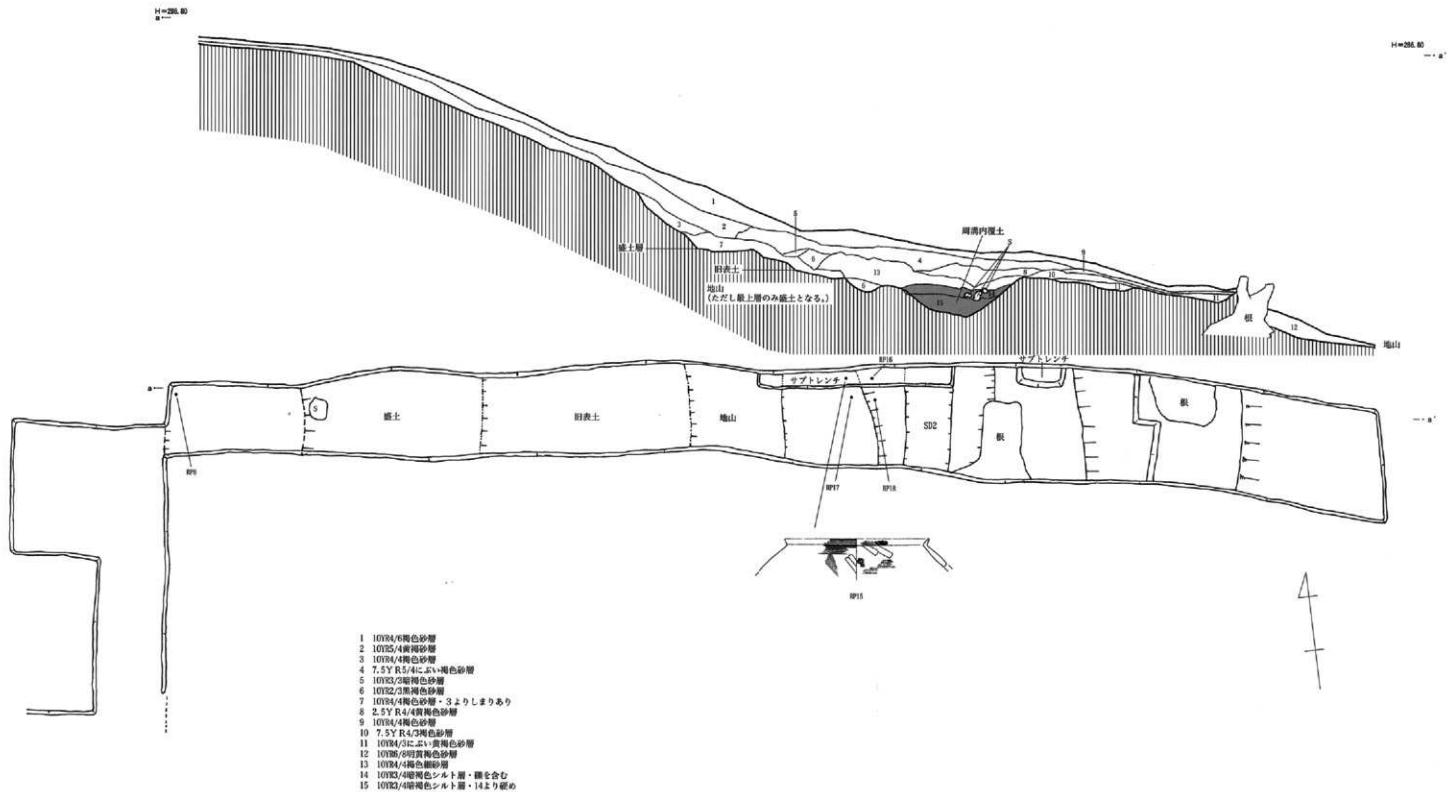


図8 Cトレンチ平面・断面図

れる。

なお、この調査区の墳丘の高さは、調査区西面側では、墳頂部のもっとも高いところからでは、盛土と地山の境界線まで90cm、周溝底面まで2m32cm、周溝外の立ち上がりまで1m78cmとなる。また、墳頂部中央からみると、盛土と地山の境界線まで86.6cm、周溝底面まで2m28.6cm、周溝外の立ち上がりまで1m74.6cmとなる。Aトレンチと比較すると、盛土と地山の境界線までの高さや墳麓までの高さの数値が低いようである。このことはもともとの地形が、南から北に向かって高くなっていたことを示している。

#### 4 Cトレンチ

この調査区は、墳丘東側にいれた80cm×13.3mの調査区で、東面の下部をあとで拡張している。ここでは明確にテラスが確認されている。集落のある盆地東側にむかって壁のようにそびえ立つ急な斜面があり、その下に2m34cm程度の幅をもつテラス（高さ96.7cm）がまわっている。テラスの下に幅1m63cm（底面70cm）の区画溝といった方が正確と思われる周溝がまわる。さらにその東側には周溝堤（外堤）といえる高まりがあり、周辺に貼石がみられる。その高まりが東に2m55cmほど続き、急な斜面（崖面）へと続く。

テラスの部分は基本的に地山を削り出し、その上に5cm～10cm程度の厚さの土を盛つて形成している。また、急な墳丘斜面部分は旧表土及び盛土の層である。周溝外側の高まりは周溝の底面からみて49.2cmの高さを有している。この高まりと周溝は同じ土層のもので、地山を削り出して周溝をつくっている。また、貼石はその土層直上東側にあり、出土状況からみて古墳築造時には貼られていたものと思われる。墳丘の高さは、墳頂部のもっとも高いところからでは、テラス面まで2m78.3cm、周溝底面まで3m75cm、周溝外の高まりから斜面に移る地点まで3m65.8cmとなる。また、墳頂部中央からみると、テラス面まで2m74.9cm、周溝底面まで3m71.6cm、周溝外の高まりから斜面に移る地点まで3m62.4cmである。なお、この調査区の周溝内からは、壺と推定される土師器が出土している。前述した東側の崖面は、現在確認できる古墳東側の個人のプレハブまでの斜面が階段状に成形され、一部にはテラス状になっているところもある。

このことは、この斜面の土を墳丘に盛るために取ったことと、集落側の盆地からの眺めのことを考えてのこととも思われる。

#### 5 Dトレンチ

この調査区は墳丘の西側に設定したもので、70cm×8.2mとなっている。この地点では、周溝は確認できなかった。盛土の部分は調査区東端から4m75cmのところまで続き、そのあと墳麓部分までは2m60cmの幅を有している。

のことから、この古墳は部分的であるにしろ西側については2段築成の古墳であると考えられる。

上段は盛土により形成し、下段は旧表土及び地山を削り出して造っているといえる。

この調査区部分の墳丘の高さは、墳頂部のもっとも高いところからでは、盛土と地山の境界線まで1m63.4cm、墳麓部まで2m57.1cmとなる。また、墳頂部中央からみると、

盛土と地山の境界線まで 1 m60cm、墳麓部まで 2 m53.75cm となっている。

この調査区の墳麓部からも器台の一部や底部穿孔壺、壙などの土師器が出土している。墳麓部の表土下から多量の石が検出されたが、その石が混じる層の下層がボクボクとした砂層で、表土に近いものであり、かつその下層から土師器が出土していることから当古墳造成時とは関係がない集石であると判断している。墳丘からの落石による可能性や、後世の集石が考えられる。また、東側のCトレンチとくらべて盛土と地山の境界線や墳麓線までの高さが少ないので、もともと西から東へと下がっていく地形の上に築造したためと考えている。

## 6 Eトレンチ

この調査区は、墳丘形態確認のため設定したもので、墳丘より北東側に放射状に設定している。当初 1 m × 4 m50cm としたが、その西側のBトレンチを調査した際に、明るい褐色の細砂層が検出された段階で、墳麓線が北北東方向に曲がり込む可能性があったため、部分的にトレンチをL字型に変更している。

そのあと墳麓線を確認するために、隨時拡張していった。理由は北側の平坦面を持つ丘が前方部である可能性が考えられたからである。墳丘より崩落した（入り込んだ）土と、もともとの地山の北側（周溝の北面）の土が非常に似ていて紛らわしいため、前方部を持つ古墳としての視点により拡張したものである。結果的には、南北の尾根を切断する形で周溝を切っていることが判明し、方墳であるとの判断を決定する資料となった。基本的に、粘土質の黄褐色の層が周溝の底部である。部分的に暗褐色の細砂層（空気にふれていないと明るい色調となっている）が東側に入り込む。

その層は、Cトレンチの周溝や周溝外の高まり部分の層と基本的に同じである。

墳丘より周溝部分にかけて、器台・高壙などの土師器片が出土している。

調査区東側の当初設定した放射状のトレンチ部分の数値は次の通りである。

盛土の部分は調査区西南端から 1 m43cm のところまで続き、その後墳麓部分までは 1 m63cm となる。この調査区の墳丘の高さは、墳頂部のもっと高いところからでは、盛土と地山の境界線まで 2 m24.8cm、周溝底面まで 3 m17.4cm、周溝外の立ち上がりまで 3 m15.8cm となる。また、墳頂部中央からみると、盛土と地山の境界線まで 2 m21.4cm、周溝底面まで 3 m14cm、周溝外の立ち上がりまで 3 m12.4cm となっている。周溝の外側の立ちあがりは土層の断面で確認できた。なお、周溝が北東側に立ち上がる部分は削平されている可能性が考えられる。また周溝の幅は 3 m70cm（底面で 2 m90cm）、高さは墳丘側で 69cm、周溝に立ち上がる側で 18cm となる。前述したが、この周溝の外側には若干の高まりしか確認できなかった。

なお、盛土部分としているところのうち、上部には灰化物が混じらず、下部には灰化物が混じるようになる。下部については旧表土（古墳築造時の表土）であると考えている。

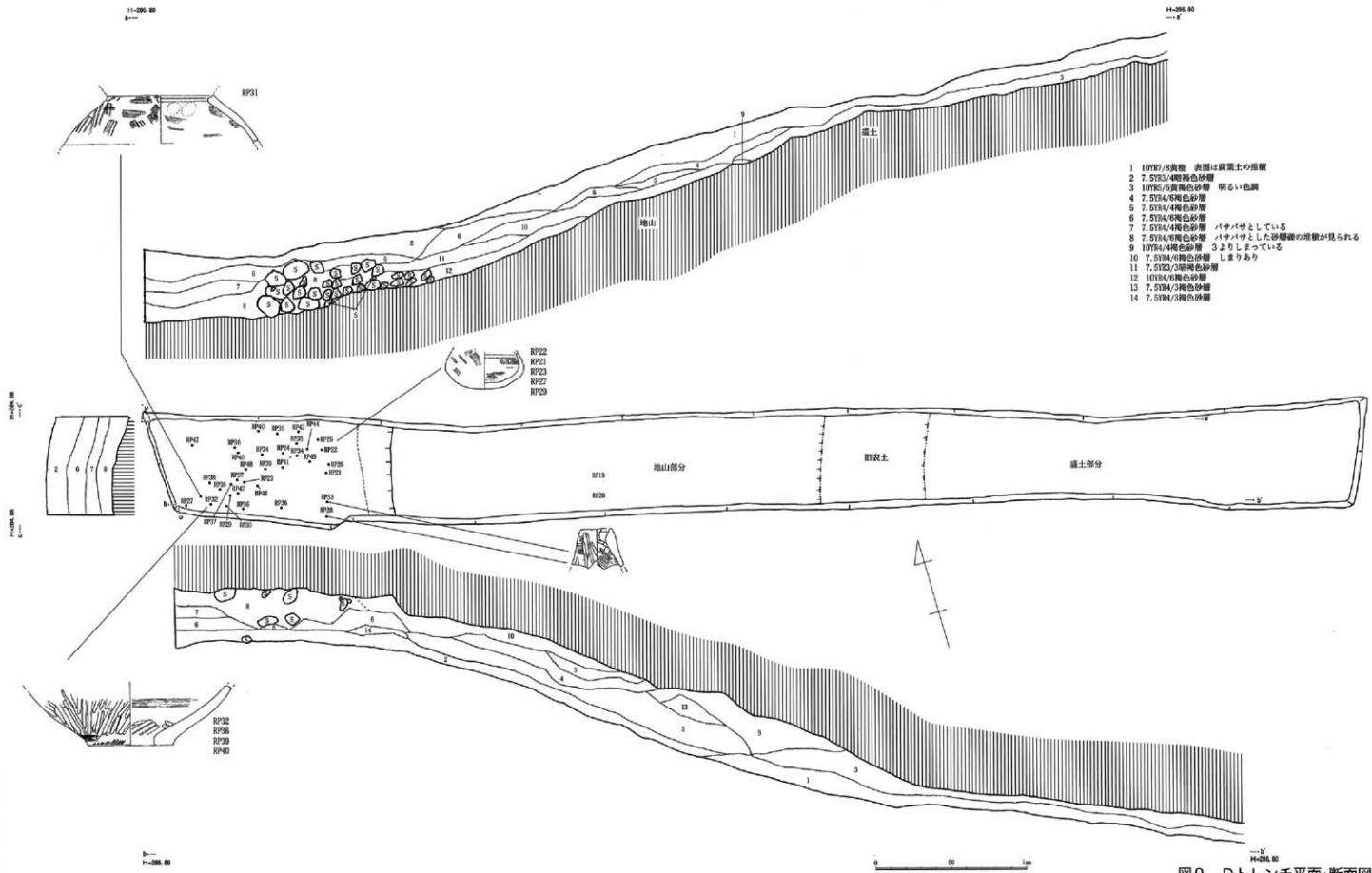
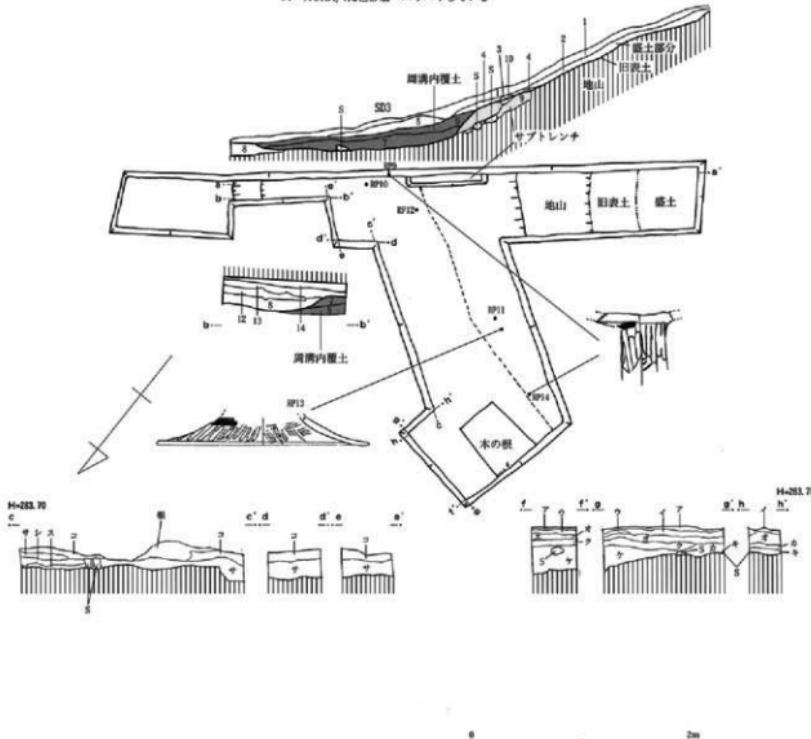


図9 Dトレンチ平面・断面図

1. 107R3/4褐色褐色・表土、砂層  
 2. 7.5T3/4褐色褐色砂層  
 3. 107R3/4褐色褐色砂層  
 4. 7.5T3/4褐色褐色砂層  
 5. 5T3/4に赤褐色褐色砂層  
 6. 5T3/4褐色褐色砂層  
 7. 107R3/4褐色褐色砂層  
 8. 7.5T3/4に赤褐色褐色砂層  
 9. 7.5T3/4褐色褐色シルト層・鐵を含む  
 10. 7.5T3/4褐色褐色砂層  
 11. 107R3/4褐色褐色砂層  
 ア. 7.5T3/2褐色褐色砂層・草木の根を多量に含む  
 イ. 7.5T3/4褐色褐色砂層・表土、草木の根を含む粗い砂層  
 ウ. 7.5T3/4褐色褐色砂層  
 エ. 7.5T3/4褐色褐色砂層  
 オ. 7.5T3/4褐色褐色砂層  
 カ. 7.5T3/4褐色褐色砂層  
 キ. 7.5T3/4褐色褐色砂層・バサバサしている  
 タ. 7.5T3/4褐色褐色粘土層・かたまとよしと繊りが良い粘土  
 ケ. 7.5T3/4褐色褐色粘土層・かなり粗い絞りまでの良い粘土  
 コ. 107R3/4褐色褐色砂層  
 ヤ. 107R3/4褐色褐色砂層・粗いバサバサした  
 シ. 107R3/4褐色褐色砂層・バサバサして乾燥でしまる  
 ス. 7.5T3/4褐色褐色砂層・バサバサしている

H-283.70  
—a—

H-283.70  
—a'



## 7 Fトレーナ

この調査区についても、墳丘形態確認のため設定した箇所で、80cm×5mとなる。墳丘の北西側に位置しており、墳丘に対し放射状としている。ここでも地山面が墳丘内側に向かって下がっていることを確認している。ちょうど方墳の角の部分にあたるためか、調査区の設定が下すぎるためか、トレーナ部分では2段築成とは確認できなかった。墳丘内にまるで石を立てたようなところも見受けられる。石を人為的に貼りつけているようである。周溝というより区画溝といった方が正確な周溝状遺構がある。幅1m40cm(底面50cm)、高さは墳丘側で45cm、立ち上がり側で14cmとなる。なお、後世に調査区北側に溝(約50cm幅)が切られている。

この調査区の墳丘の高さは、墳頂部のもっとも高いところからでは、周溝状遺構底面までで2m51cm、周溝状遺構の外側立ち上がりまで2m32.7cmとなる。また、墳頂部中央からみると、周溝状遺構底面まで2m47.6cm、周溝状遺構の外側立ち上がりまで2m29.3cmとなっている。

## 8 Gトレーナ

この調査区についても、墳丘形態確認のため墳丘より東南側に対し放射状に設定した箇所で、1m×3m50cmとなる。

ここでは結果として、地山の部分のみを調査している。比較的固い盤となっている部分で、Aトレーナの南部分と同じ層序が確認できる。

深掘りを行ったところでは、一旦V状に溝を切っているところがある。

また、西面では土層の落ち込みが確認できるが、東面では、不明瞭となっている。

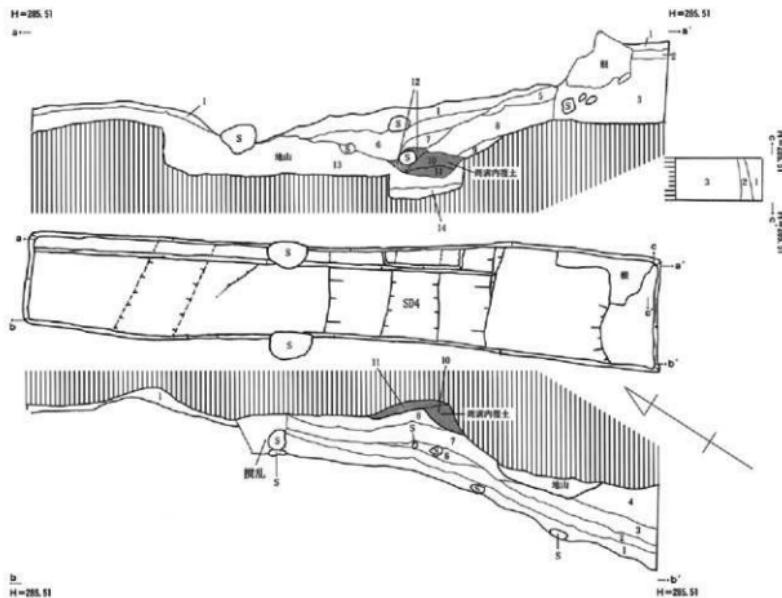
この部分は畑として開墾なども行われたところであり、東(南)面はその際に削られたと考えられる。削平されたと思われる南側には微妙な土色変化がみられたり、後世の杭による攪乱もある。その南端は斜面となる。

なお、この調査区周辺の石を観察すると稜線のある石が多い。Aトレーナでも書いたが、現在表土上にある石については、元の位置を保っているとはいえないが、特色のある石が多いという事実は、古墳に貼っていた石が崩落したものである可能性があると思われる。

結論として、この調査区については、周溝などの明確な遺構は確認できず、溝状の遺構しか検出されなかった。

参考としてあげると土層の若干の落ち込みは幅90cm(底面40cm)高さは墳丘側で15.8cm、下(南)側で10.5cmとなる。墳丘規模としては、今のところこの落ち込みのラインまでを考えている。

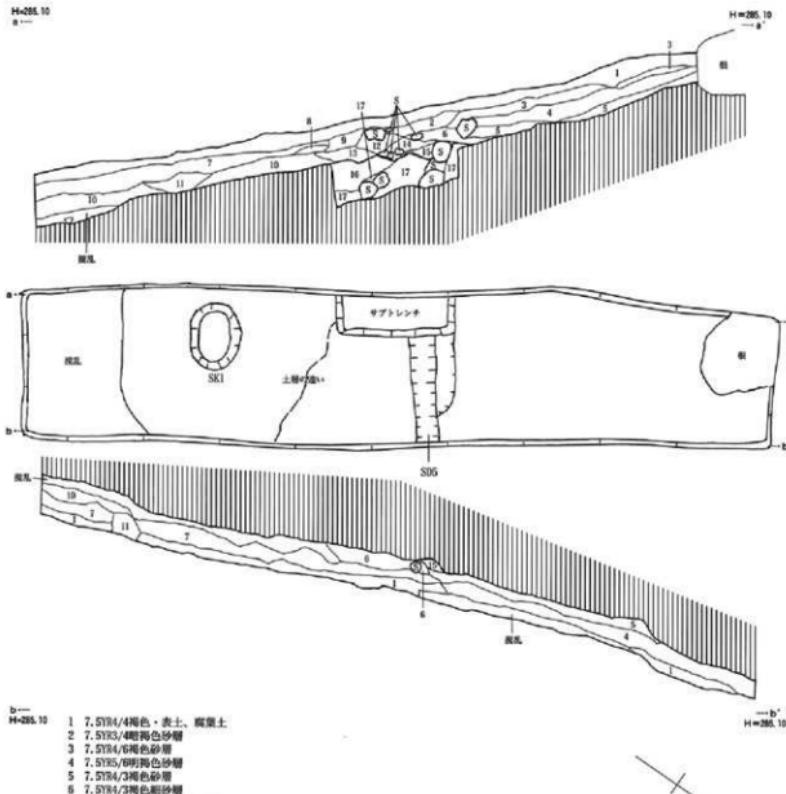
この調査区の墳丘の高さは、墳頂部のもっとも高いところからでは、落ち込み線底面までで3m43.2cm、落ち込み線の外側立ち上がりまで3m41.1cmとなる。また、墳頂部中央からみると、落ち込み線底面まで3m39.8cm、落ち込み線の外側立ち上がりまで3m37.7cmとなる。



1. 7.SYH4/4褐色・灰土・腐葉土
2. 7.SYH4/4褐色・Iと3の堆積層
3. 7.SYH4/4褐色砂層
4. 7.SYH4/4褐色泥砂層
5. 7.SYH4/4褐色泥砂層
6. 7.SYH4/3褐色泥砂層
7. 7.SYH4/2褐色シルト層
8. 7.SYH4/4褐色シルト層
9. 10YR4/5褐色細砂層
10. 10YR4/5褐色シルト層
11. 7.SYH4/6褐色シルト層
12. 7.SYH4/4褐色シルト層
13. 7.SYH4/4褐色細砂層
14. 10YR4/3褐色細砂層

図11 Fトレーニング平面・断面図

H=285.10



- b---  
H=285.10
- 1 7.SYB4/4褐色・赤土、腐葉土
  - 2 7.SYB3/4褐色海岸砂層
  - 3 7.SYB4/6褐色砂層
  - 4 7.SYB5/6褐色海岸砂層
  - 5 7.SYB4/2褐色砂層
  - 6 7.SYB4/2褐色細砂層
  - 7 7.SYB4/2褐色砂層・ゆるい
  - 8 7.SYB5/9褐色海岸砂層
  - 9 7.SYB4/4褐色砂層
  - 10 7.SYB6/6褐色砂層
  - 11 7.SYB6/4にぶい褐色砂層
  - 12 7.SYB3/4褐色海岸砂層・膠泥じる
  - 13 7.SYB4/2褐色細砂層
  - 14 7.SYB4/3褐色細砂層・膠泥じる
  - 15 7.SYB4/3褐色シルト層
  - 16 7.SYB4/6褐色細砂層・かたい
  - 17 7.SYB5/6褐色海岸砂層・かたい

図12 Gトレーニング平面・断面図

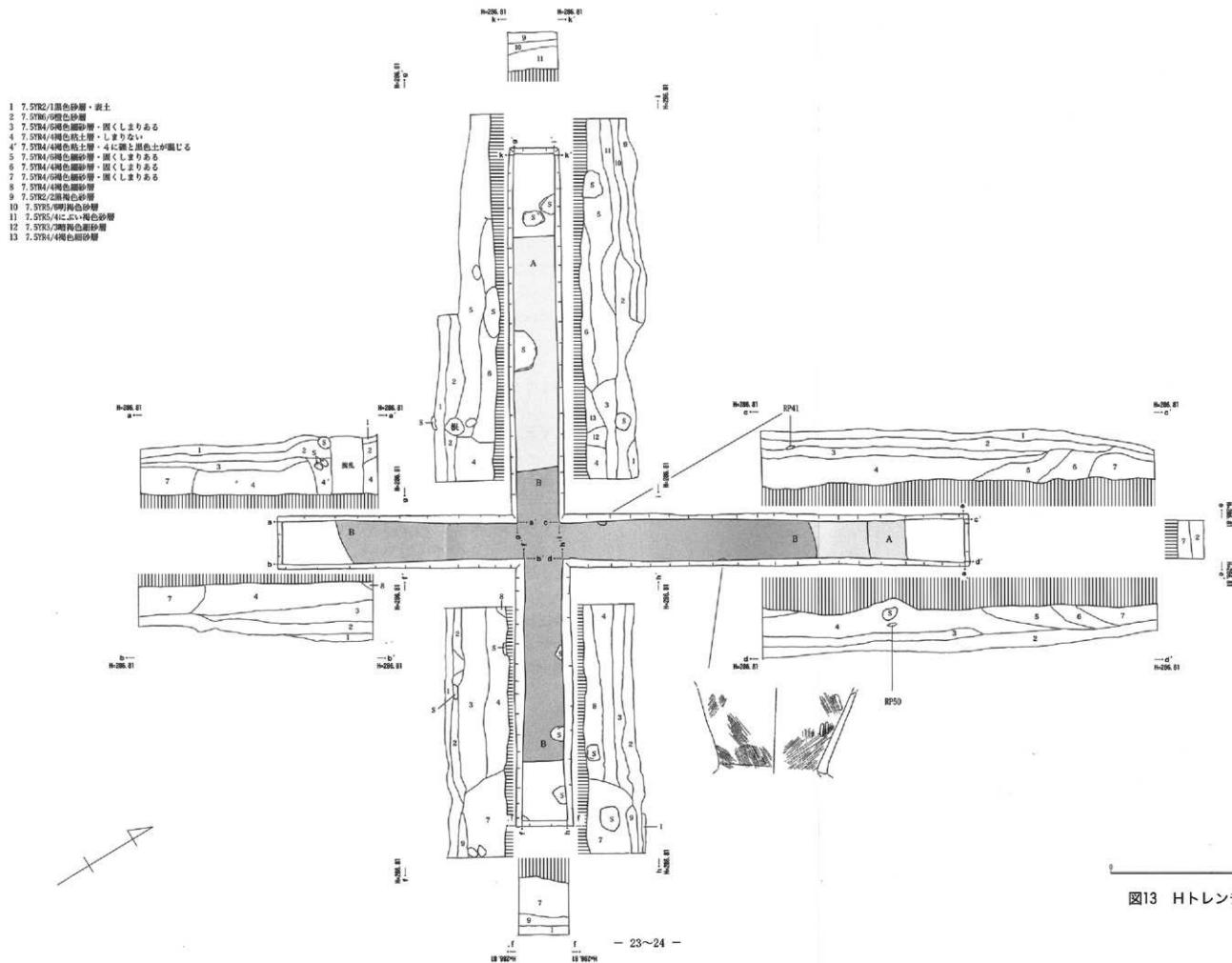


図13 Hトレンチ平面・断面図

## 9 Hトレント

この調査区は、古墳に葬られた棺を埋葬するため墳頂に掘られた、墓壙（埋葬施設）とよばれるものの埋土の土層の違いを検出し、墳頂部から見たプランを確認する目的で設定した。

墳丘の軸線に沿って十字の形で掘り下げている。南北線で40cm×5m30cm、東西線で40cm×5m30cmとなっている。十字の交差する地点の表土からで40cmほど掘り下げた。墳頂部中央から西に2m20cm、北に2m50cmのAライン（図13）と、掘り方を東に1m80cmほどずらしてBのラインの土層の変化を確認している。このことは、はじめに西（A）に墓壙を掘り、のち西（B）に墓壙で掘った可能性が考えられる。木棺による土層の落ち込みとは違うものと推定でき、この古墳において、2度にわたり埋葬がなされたことが考えられる。

Bのラインをつなぐと長辺がほぼ真北方向を向いており、長さ約3m30cm、短辺が約2m20cmとなっている。

## 10 出土遺物

発掘調査では、PR1からPR50までの土師器片が出土した。また縄文時代のものと思われる石器も1点出土している。

高坏…頸部（図14-4）が1点出土している。棒状であり、タテ方向のミガキとナデを施している。Eトレントから出土した。

器台…器台（1～3）であるが高坏であるかの判断は難しい。胎土及び色調、朱を施していることなどにより器台とした。EトレントとDトレントから出土している。

同一個体であったと思われるが、接合しなかつた。内面には朱が残り、ヨコ及びタテ方向のハケメが卓越している。

台の部分の接合面は確認できず、上面があるいははめ込み式のものであった可能性もある。脚部が床面に近づくに従ってなだらかに大きく聞く形となる。

埴（広口壺）…ミニチュアともいべき、小型の埴（5、6）がDトレントから出土した。内側の胎土が明るいピンク系の色調を呈している。摩滅していく詳細は不明だが、ナデを施していることが確認できる。底径68mmであり、胴の部分の高さは推定で28～30mmであったと思われる。

外に埴の口辺部と推定されるものが（7～9・14～18）、Bトレント、Cトレント、及びHトレントから出土している。内面に朱が施されているものもある。

壺…焼成後底部穿孔の壺（17）がDトレントから出土している。黒色に焼成され、丸い胸部をすばまた底部が受けとめている形状で、ヨコからみると「く」の字型になる部分には、ヨコナデにタテミガキを施したあと、部分的にナナメのハケメを小さく施している。

接合しなかつたが、その壺と同じ個体であったと思われる小破片が多く出土した。

その他、別個体の2つの壺の小片が出土している。

石器…縄文時代の石器が1点出土した。剥片石器で、珪質頁岩である。

以上、出土した土器は型式から4世紀第2四半期から第3四半期のものと推定される。

の中でも若干の時期差があることから、Hトレンチの結果からみて、2回にわたり埋葬がなされた可能性が高いと推定される。

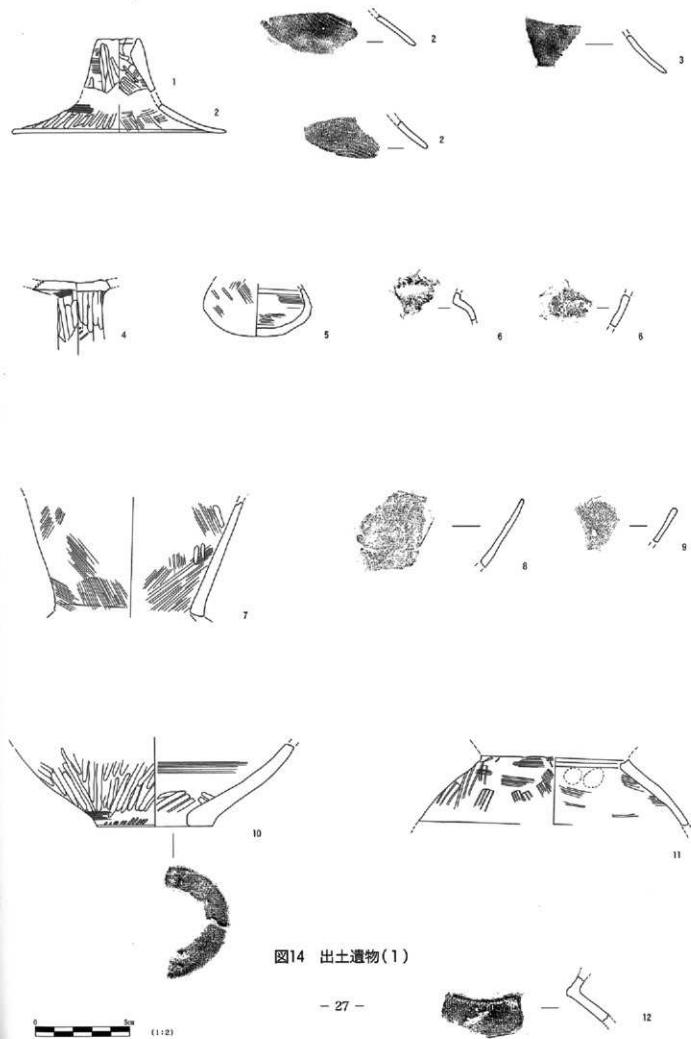
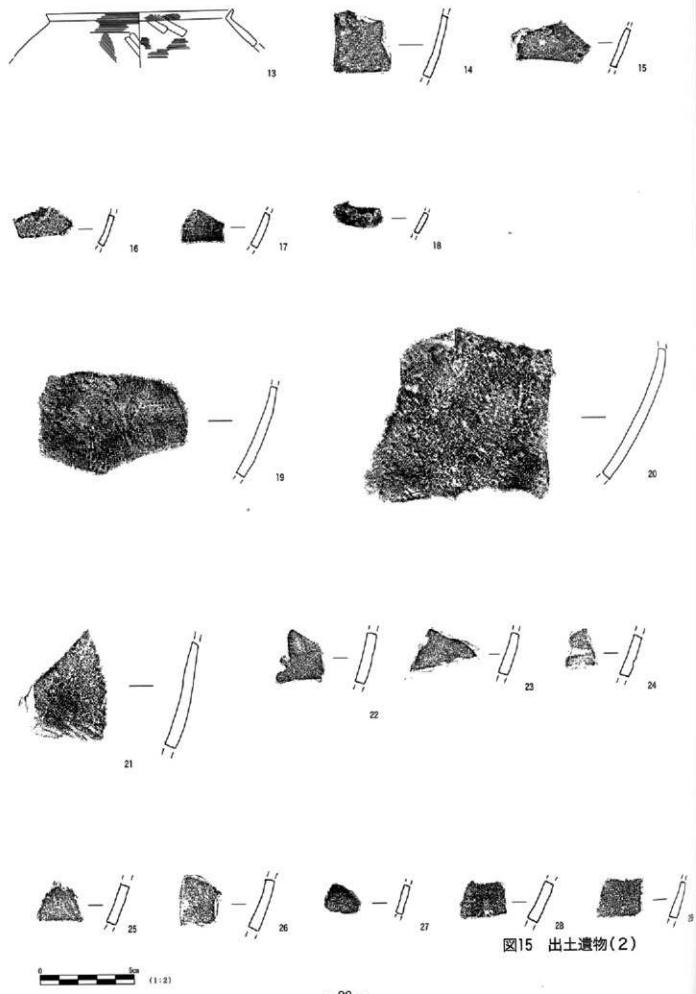
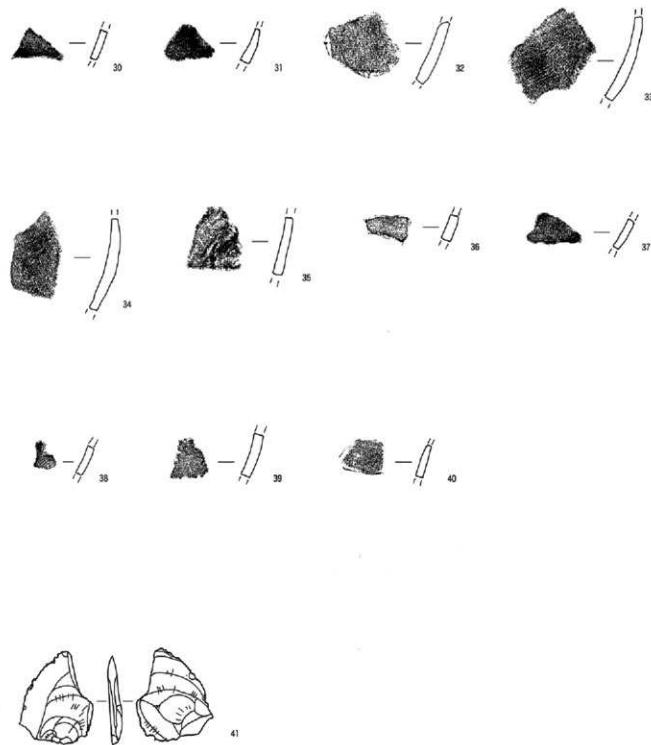


図14 出土遺物(1)



- 28 -



- 29 -

表1 出土遺物観察表

遺物 番号	種類 区分	後縁 寸法	幅縁 寸法	出土位置	計測値 (mm)	測量 部位	備考	
							口縁 幅	口縁 高さ
1/14 - 9 - 1	土師器	縁台	ヨトレンド	23	-	ヨタミガキ・ヨコナダ	ヨコハケ・ケズリ・タナダ	RPP2-33
2/14 - 9 - 2	土師器	縁台	ヨトレンド	(110)	-	ヨタミガキ・ヨコナダ	ヨロハケー・既タテハケ タナダ	RPP13 3片 内側朱塗り
3/14 - 9 - 3	土師器	縁台	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ハケナ	RPP14 (13.7と同一個体か)
4/14 - 10 - 4	土師器	縁台	ヨトレンド	(22)	-	ヨタミガキ・ナダ	-	RPP14-14 内側朱塗り
5/14 - 9 - 5	土師器	縁 (小型)	ヨトレンド	-	68	ヨタミガキ・ナダ	ヨタミガキ・ナダ	RPP2-21-22-27-29 内側朱塗り
6/14 - 11 - 6	土師器	縁 (小型)	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ・ナダ	ヨタミガキ・ナダ	RPP2-20-22.2 同上(後か) 2片 内側朱塗り・白墨
7/14 - 9 - 7	土師器	縁 (口沿部)	ヨトレンド	(90)	-	ヨハケ・ミガキ・ナダ	ハケナ・ミガキ・ナダ	RPP15 (13.7と同一個体か)
8/14 - 11 - 8	土師器	縁 (口沿部)	ヨトレンド	-	-	ヨハケ・ミガキ・ナダ	ハケナ・ミガキ・ナダ	RPP11
9/14 - 9 - 9	土師器	縁 (口沿部)	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ・ナダ	ヨタミガキ・ナダ	RPP 3 内側朱塗り
10/14 - 10 - 10	土師器	縁	ヨトレンド	(60)	-	ヨタミガキ・ナダ	ナダ・ミガキ・ケズリ	RPP2-30-39-40 内側朱塗り
11/14 - 11 - 11	土師器	縁	ヨトレンド	(95)	-	ヨタミガキ・ナダ	ハケナ・既ヨコナダ	RPP12 (13.7と同一個体か)
12/14 - 10 - 12	土師器	縁	ヨトレンド	(85)	-	ヨタミガキ・ヨコナダ	ナダ	RPP47 指当て痕
13/15 - 11 - 13	土師器	縁	ヨトレンド	(120)	-	ナダ・ヨタミ	ヨロナダ	RPP15
14/15 - 11 - 14	土師器	縁 (口沿部)	ヨトレンド	-	-	ナダ	ヨコナダ	RPP 2
15/15 - 11 - 15	土師器	縁 (口沿部)	ヨトレンド	-	-	ヨロナダ	ヨロナダ	RPP4
16/15 - 11 - 16	土師器	縁 (口沿部)	ヨトレンド	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	RPP6
17/15 - 11 - 17	土師器	縁 (口沿部)	ヨトレンド	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	RPP6
18/15 - 11 - 18	土師器	縁 (口沿部)	ヨトレンド	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	RPP6
19/15 - 11 - 19	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ナダ	ナダ・ケズリ	RPP16
20/15 - 11 - 20	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ・ナダ	ナダ・ケズリ	RPP17 19.2 同上(後か)
21/15 - 11 - 21	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ヨコナダ	RPP18
22/15 - 11 - 22	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ヨコナダ	RPP19 内側朱塗りに墨色斑じる
23/15 - 12 - 23	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ヨコナダ	RPP20 外側黒色
24/15 - 12 - 24	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ヨコナダ	RPP45
25/15 - 12 - 25	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ナダ	ナダ	RPP46 外側黒色
26/15 - 12 - 26	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ・ハケメ	ナダ	RPP47 外側黒色
27/15 - 12 - 27	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨハケ・ナダ	ナダ	RPP48 外側黒色
28/15 - 12 - 28	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	RPP52
29/15 - 12 - 29	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ヨコナダ	RPP53 外側黒色
30/16 - 12 - 30	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ・タテミガキ	ヨコナダ	RPP21
31/16 - 12 - 31	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ナダ	RPP54
32/16 - 12 - 32	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ナダ	RPP55 外側黒色
33/16 - 12 - 33	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ・ハケメ	ナダ (口蓋)	RPP56 外側黒色

遺物 番号	種類 区分	後縁 寸法	幅縁 寸法	出土位置	計測値 (mm)	測量			備考
						口縁 幅	底盤 幅	底盤 厚さ	
34/16 - 34 - 34	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ・ヨコナダ	ナダ	ナダ	RPP30 外側黒色に墨色
35/16 - 35 - 35	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ナダ	ナダ	RPP43 外側黒色
36/16 - 36 - 36	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ	ナダ	ナダ	RPP49 外側黒色
37/16 - 37 - 37	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨタミガキ・ハケメ	ナダ	ナダ	RPP59 外側黒色
38/16 - 38 - 38	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨコナダ	ナダ	ナダ	RPP66 外側黒色
39/16 - 39 - 39	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	ヨコナダ	RPP34 外側黒色
40/16 - 40 - 40	土師器	縁	ヨトレンド	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	ヨコナダ	RPP47 外側黒色

## 11まとめ

先に示した今回の調査の目的をあげてみる。

- ①この塚が古墳時代の古墳か、中世の墳墓や宗教関連の遺構であるかの確認
- ②この塚の形はどのような形状をしているかの確認。具体的には古墳であるとしたら円墳か、方墳か、もしくは前方後円墳か前方後方墳かの調査
- ③この塚の形状がわかったとしたら、その規模（大きさ＝長さ・広さ・高さ）の確認
- ④古墳であるとしたら、その埋葬施設プランの部分的確認

まず①については、本遺跡からの出土土器が4世紀第3四半期までのものであることから、古墳時代前期に造営された古墳であることがわかった。

②の形状については、方墳である。航空写真などで見るとかなり円に近い形になっているが、墳頂面の方形の形や、FトレンチからBトレンチ、Eトレンチと続く周溝の直線のライン、西側の墳麓線が直線であることを考慮すると方墳であると考えられる。

③については、軸線は東側にぶれ、N-28°-Eとなるが、直径で南北19m80cm、東西18m10cmである。周溝を含めれば、南北21m50cm、東西20m20cmとなる。また高さは、最も高低差のある東側の面で3m71.6cmとなる。

南面と東面にはテラスが、南面から東面・北面にかけて周溝がめぐる。特に北東部分は周溝がもっと大きくなっている。

また、墳丘面や積土の土砂留めなどのため、盛土の際に石を利用していると思われる。墳麓部と墳頂平坦面及び周溝外堤の一部で、葺石（もしくは貼石）をおこなったと推定される。

④埋葬施設の部分的確認はHトレンチで実施している。その結果2度にわたり埋葬がなされた可能性が考えられる。

本古墳は出土土器からみて、遅くとも4世紀の第3四半期にはつくられていた古墳で、2度にわたり埋葬がなされたため、若干の時期差がある土師器が出土した可能性が考えられる。

以上のことから、この要害古墳（第1号墳）は、当町大塚地区にある大塚天神古墳に先行する、今までのところ山形盆地で最古となる「方墳」であることが判明した。また、石・礫を使用して土留めや整形区画をするための、葺石（もしくは貼石）をもつ古墳として、山形盆地では珍しい例である。

海拔286mの地点に立地する古墳であり、全国の前期の古墳と同じように眼下のムラムラ（山形盆地）を一望に見渡せるところに位置している。

山形盆地の古墳時代前期を考えるうえで貴重な遺跡といえる。

なお、最後になりましたが、寒くなつてからの作業となり、大変な中、身を粉にして働いてくださった作業員の皆様はじめ、関係各位に多大なる感謝を申しあげる次第です。  
（※なお、参考文献については大変多数のため省略させていただきます。）

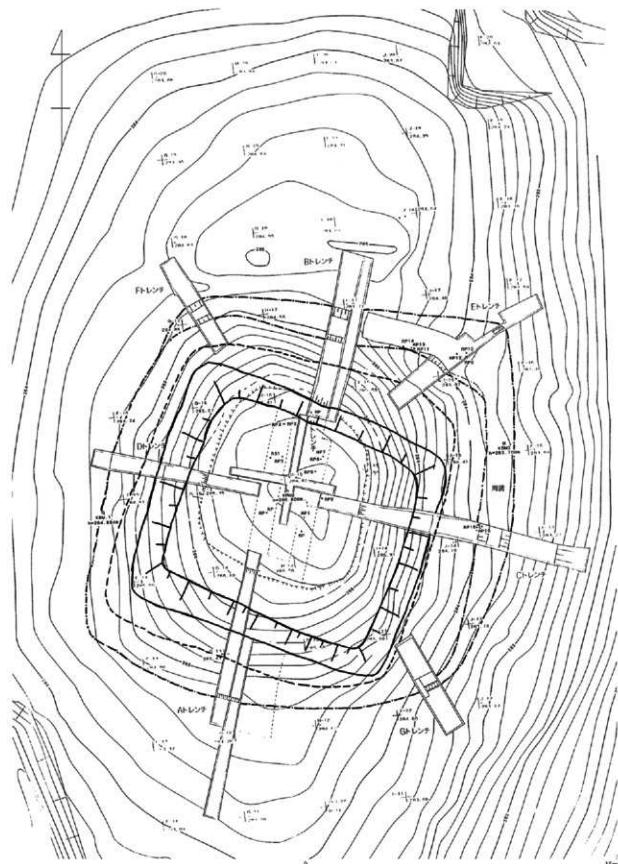


図17 要害古墳(第1号墳)推定図1

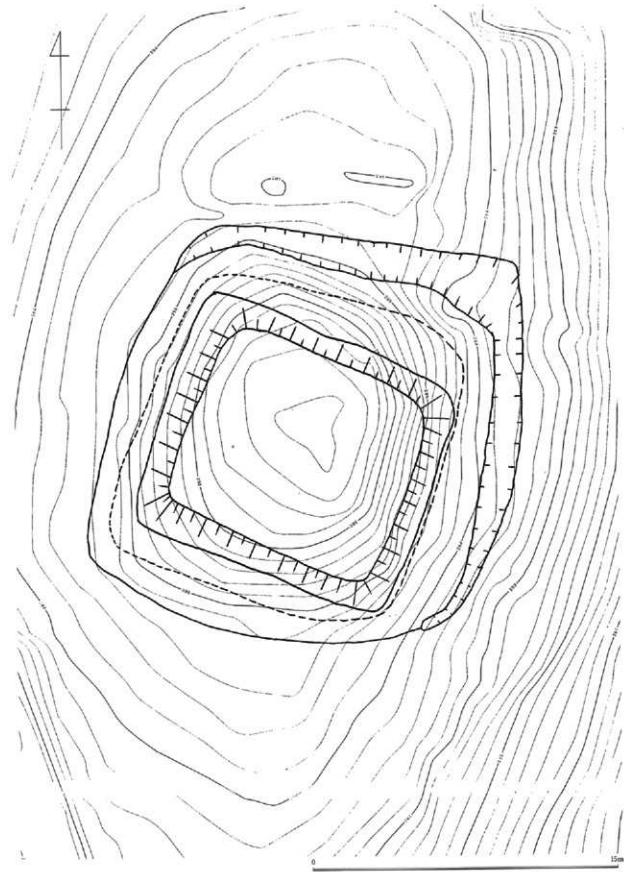


図18 要害古墳(第1号墳)推定図2

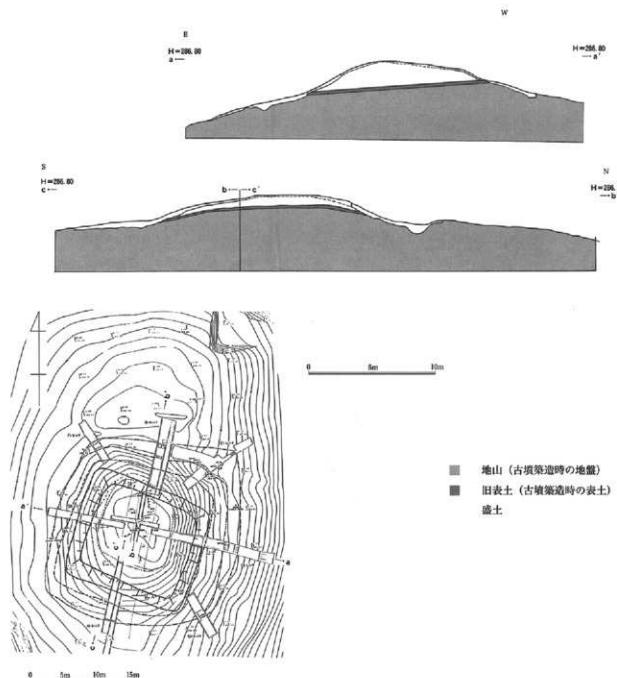


図19 墳丘概念図

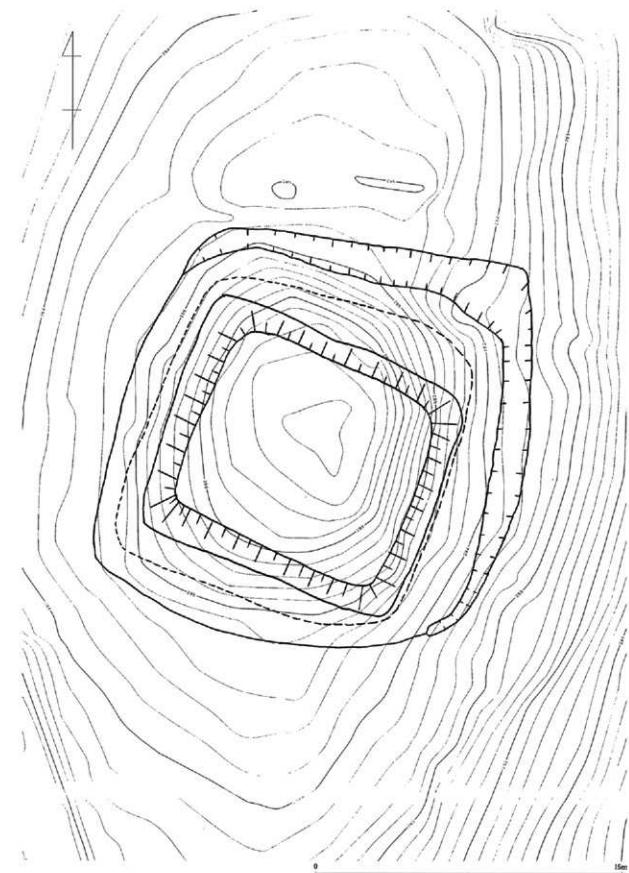
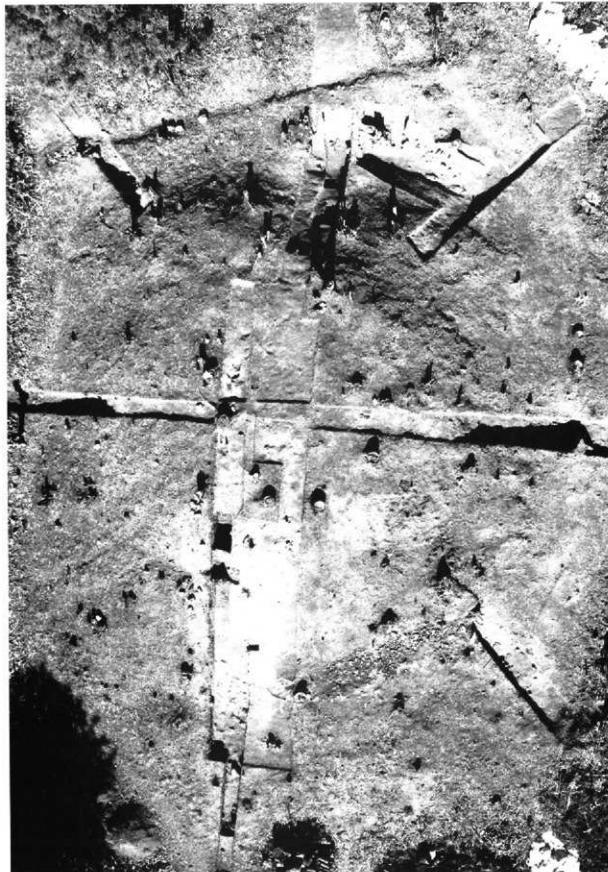


図18 要害古墳(第1号墳)推定図2

図版1



上空から見たトレンチ設定状況

図版2



調査前風景



調査中風景

図版3



調査風景



現地説明会風景



古墳遠景



Aトレンチ表土を剥いだ状況

図版4



Aトレンチサブトレンチ断面



Aトレンチ調査状況



Bトレンチサブトレンチ断面

図版5



Bトレンチ焼土状況



Bトレンチサブトレンチ断面



Cトレンチ



Dトレンチ

図版6



Eトレンチ

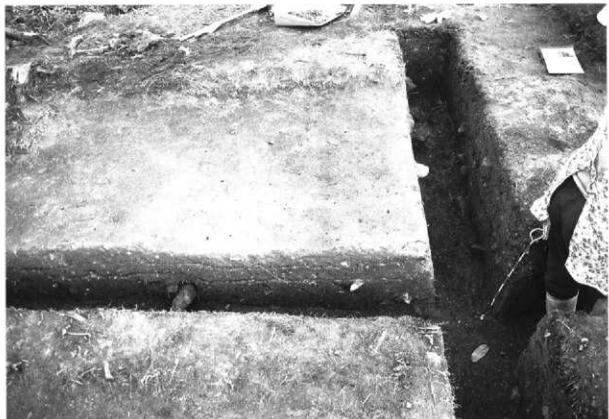


Fトレンチ



Gトレンチ

図版7



Hトレンチ

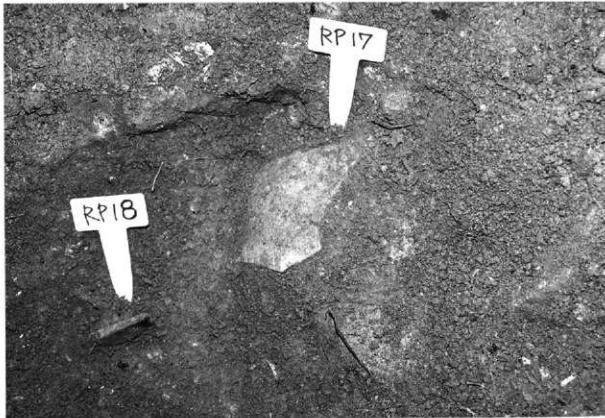


墳頂部の表土を剥いだ状況

図版8

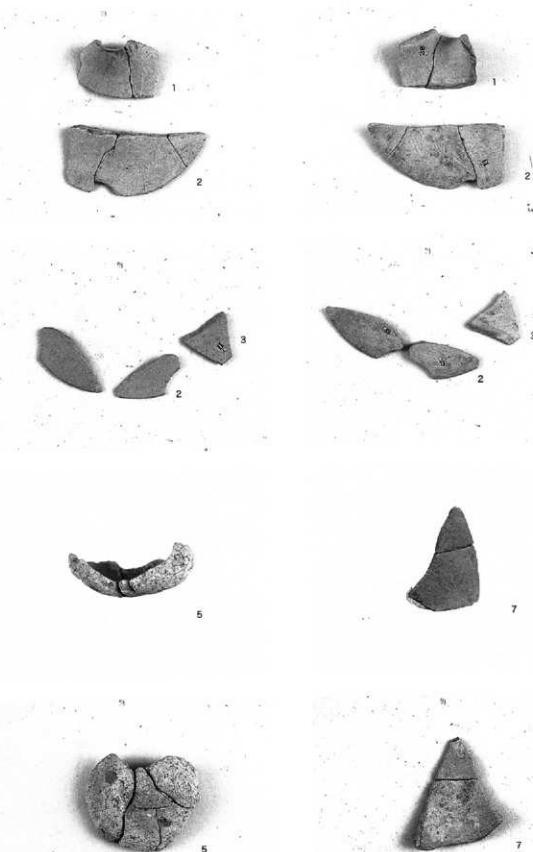


遺物（土師器）出土状況（Hトレンチ）



遺物（土師器）出土状況（Cトレンチ）

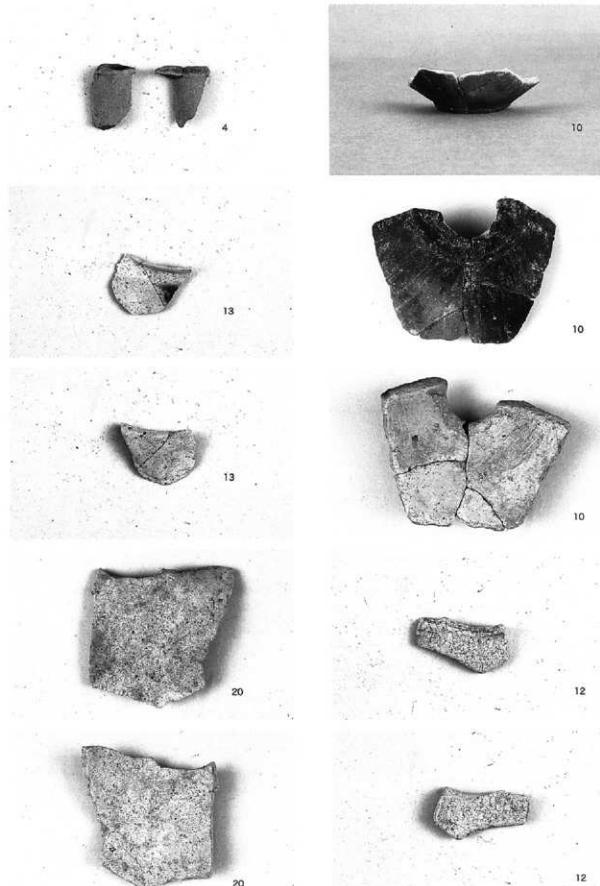
圖版9



出土遺物(1)

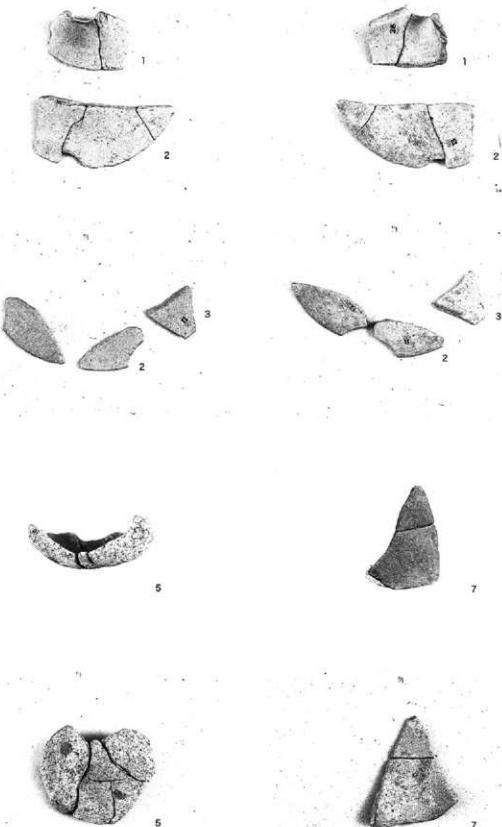
- 44 -

圖版10



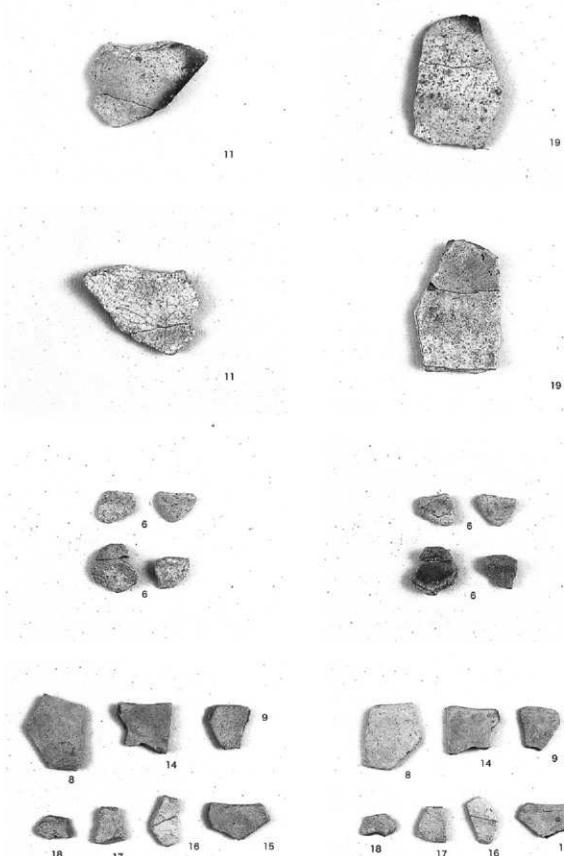
出土遺物(2)

- 45 -



出土遺物 (1)

図版11



出土遺物（3）

- 46 -

図版12



出土遺物（4）

- 47 -

報告書抄録

ふりがな 書名	ようがいこふんだい1 ごうふんはつくつちょうさほうこくしょ 要害古墳(第1号墳)発掘調査報告書						
翻書名							
巻次							
シリーズ名	山辺町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第11集						
編著者名	三浦 浩人						
編集機関	山辺町教育委員会						
所在地	〒990-0399 山形県東村山郡山辺町緑ヶ丘5番地						
発刊年月日	平成14年3月31日						
所収遺跡名	所 在 地	コード	北 緯 東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号						
要害古墳 (第1号墳)	山形県東村 山郡山辺町 大字要害字 黒坂959番 地の197同 959番地の 199	6301	38° 16' 08" Y G I .93	140° 14' 31" .86	20011005~ 2001122	46.3m <sup>2</sup>	学術調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
要害古墳 (第1号墳)	古墳	古墳時代 前期	周溝 墓石(貼石)	土師器 (石器)	山形盆地で現在までのところ最古に属する前期古墳(方墳)である。		

報告書抄録

ふりがな 書名	ようがいこふんだい! ごうふんはつくつちょうさほうこくしょ 要害古墳(第1号墳)発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山辺町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	三浦 浩人							
編集機関	山辺町教育委員会							
所在地	〒990-0392 山形県東村山郡山辺町緑ヶ丘5番地							
発刊年月日	平成14年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積	調査原因	
要害古墳 (第1号墳)	山形県東村 山郡山辺町 大字要害字 黒坂959番 地の197同 959番地の 199	6301 386 山辺町遺 跡番号 Y G 1 .93	38° 16' 08" .93	140° 14' 31" .86	2001.10.05~ 2001.12	46.3m <sup>2</sup>	学術調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
要害古墳 (第1号墳)	古墳	古墳時代 前期	周溝 葺石(貼石)	土師器 (石器)	山形盆地で現在までのところ最古に属する前期古墳(方墳)である。			

要害古墳(第1号墳)発掘調査報告書

山辺町埋蔵文化財調査報告書第11集

平成14年3月31日

編集 山辺町教育委員会  
発行 山辺町教育委員会  
〒990-0392 山形県東村山郡山辺町緑ヶ丘5番地  
電話 023-667-1115

印刷 藤庄印刷株式会社  
〒990-0821 山形県山形市北町1-3-1  
電話 023-684-5555